

### 第三章 玉鬘の物語 裳着の物語

[第一段 内大臣、源氏の意向に従う]

大臣(おとど、内大臣は)、\*うちつけにいと\*いぶかしう(急な話にとても興味が惹かれて)、\*心もとなうおぼえたまへど(姫に会うのを待ち遠しく御思いになるが)、\*「いぶかし」は「訝し」とも表記され、意味もく不審に思う、怪しげだ>とあるが、古語辞典によれば原義はく不明瞭な物事を知りたくて気懸かりで心が晴れない>ということらしく、此处ではく気懸かりなほど興味を持つ>くらいに思う。また注にも、この文についてく『集成』は「内大臣は、もう早速(玉鬘が)どんな娘か、早く会いたいと思われなさるのだが」。『完訳』は「内大臣は、突然のことなので、どうも納得がいかず、またもどかしいお気持ちになられるけれども」と訳す。>とあり、「どんな娘か(と興味を惹かれ)」と「どうも納得がいかず」という二通りの解釈を列記しているが、「いぶかし」の原義も然り乍ら、「たまへど」の逆接で下文の「ふと親がらむも便なからむ」に繋がる構文解釈としては、『集成』説に従いたい。\*「こころもとなし」はく頼り無くて不安>でもあるが、「もとな」はく根拠無くむやみに、無性に>という語感らしく、物や人をく待ち焦がれて落ち着かない>という意味にもなる。現代語と同じだ。

「ふと(考えも無く)、しか受けとり(その姫を娘として引き取り)、親がらむも便なからむ(親らしくするのも不都合かも知れない)。\*尋ね得たまへらむ初めを思ふに(六条殿が姫を探し出して邸に引き取ってお世話なさろうという初めのお気持ちを思えば)、\*定めて心きよう見放ちたまはじ(きつと潔く手放しなさないだろう)。やむごとなき方々を憚りて(六条院の高貴なご夫人方を憚って)、\*うけばりてその際にはもてなさず(姫を歴然とは妻の座にお着けなさらず)、\*さすがにわづらはしう(と云って娘だという建前では済まされない始末の悪さに)、ものの聞こえを思ひて(世間体を考えて)、\*かく明かしたまふなめり(このように私に出自を明かしなされたのだろう)」 \*「尋ね得たまへらむ初め」は注にく主語は源氏。「たまへ」尊敬の補助動詞、已然形。「らむ」推量の助動詞、視界外推量のニュアンス。>とある。「初め」について源氏殿は藤原殿にどういう説明をしたのだろうか。初めから、姫を藤原殿と夕顔との間の子供だと知っていた、とは言えないだろう。自分も情を通じた覚えがある女の子だから、自分の子かも知れないと思って引き取った、という言い方を源氏殿は大宮にはしていた。同様の言い方を藤原殿にもしたのだろうか。だとすると、「初め」はく子供の少ない源氏殿が女子の一人として世話しようと思った親心>のようにも見える。しかし下文にあるように、藤原殿は姫が今は源氏殿のお手付きである事をはっきりと認識している。ただ、それを源氏殿が明言する筈は無く、それは自分と源氏殿および男と言うもの一般に対する藤原殿の認識からして、実子でないことが分かった時点で源氏殿は姫を女と見ることが当然だという判断ではあるのだろう。源氏殿が大宮に語った曖昧な説明を、そのまま藤原殿にもしたとして、だとしても藤原殿の理解度は当然に世間を知っている大臣の見識だ、ということか。源氏殿が藤原殿にどう説明したのかが伏せられているので、これ以上の解明は無理だ。\*「定めて」はくきつと、必ず>という副詞、とある。源氏が意を決して、という意味かと思っただ、「心きよう」ではなく「たまはじ」に掛かるようだ。また注には、この文はく『完訳』は「源氏と玉鬘の愛人関係を直感」と注す。>とある。そうかも知れないが、そうすると「初め」から源氏殿は姫を藤原殿の娘と知っていた、いや実際に知ってはいたが、ということも藤原殿に明かしたことになるのではないだろうか。そして、それは少なくとも今の時点では有り得ない、と私は思う。藤原殿が源氏殿の話はどう聞いたのかは分からないし、最初から疑って聞いたという事は大いに有り得る。それでも初耳の、しかも宮の前での事情説明で、藤原右家の四姫である藤原殿の正妻と常夏の確執、さらに其処に付け込んだ源氏殿の計算、そして当時の藤原殿の力量、などなどという機微までは源氏殿が話し出せもしないし、藤原殿が理解できる筈も無い。藤原殿がどう考えるかは、正にこれ

からの話だ。ただ、「直感」ということは有ったかも知れない。\*「うけばりてその際にはもてなさず」は<堂々と妻にはしない>だから、この文こそは、源氏殿が姫を娘ではなく女として愛している、と藤原殿が思っていることの明示だ。\*「さすがに」の中身は<姫を娘と公言していることに照らして>に違いない。\*「かく明かしたまふなめり」については、注に<『完訳』は「隠し通せぬ厄介さ。以下、内大臣は、今になって玉鬘の件を打ち明ける源氏の心を見抜く」と注す。>とある。確かに、これは源氏の当面の事情を見抜いた藤原殿の洞察力だ。が、核心は源氏殿の一連の行動を、藤原殿がどう考えるか、にある。恐らくは、是はこの物語の核心に近い。そして、その藤原殿の判断には、当然に藤原殿自身を取り巻きさまざまな事情が絡む。そして恐らくは、これには作者を取り巻く関係者の思惑が絡む。見物だ。

と思すは(と源氏殿の都合で事が推移していると御思いになると)、\*口惜しけれど(悔しかったが)、\*「口惜し」は<くちをし>との読みで<不本意だ、残念だ、情けない>とあるが、現代語では<くやし>とも読めるし、此処での意味は<悔しい(憎らしい)>で、それは<娘が知らぬ間に源氏の女されていたこと>というよりは<事態が源氏主導なこと>のようだ。それが下文に明示される。

「\*それを疵とすべきことかは(姫が源氏殿の娘ではなく私の娘と分かって、源氏殿の女となることを汚点とすべきことだろうか)。ことさらにも(此方から進んででも)、かの御あたりに触ればはせむに(太政大臣のあの御方に近づけさせるのに)、などかおぼえの劣らむ(如何して世に聞こえの悪いことがあるか)。\*「それ」とは<娘が源氏の女になること>だろうが、「初め」は<源氏殿は姫を私の子だとは知らずにいた>という源氏殿が話したであろう筋立てを、あえて補語する。関係者の認識の推移を確認したいので明示して置きたい。なお、注には<『完訳』は「内大臣は源氏を最高の権勢家として、玉鬘との妻妾関係を悪くないと見る」と注す。>とあるが、それは「などかおぼえの劣らむ」と下文に明示されている。

宮仕へぎまにおもむきたまへらば(宮仕えという形になりなされると)、\*女御などの思さむこともあぢきなし(弘徽殿女御たちの帝への御仕え方とも合わないだろう)」と思せど(と御思いに成ったが)、「ともかくも(どちらにしても)、思ひ寄りのたまはむおきてを違ふべきことかは(源氏殿がお考えになり仰った決定には背けまい)」\*「女御などの思さむこと」は注に<弘徽殿女御と玉鬘は異母姉妹、二人が帝の寵愛を争うことを懸念。>とある。

と、よろづに思しけり(いろいろとお考えになりました)。

かくのたまふは(このお話を源大臣が内大臣に為さったのは)、二月\*朔日(きさらぎのついたち、二月初旬)ころなりけり(ころでした)。十六日、彼岸の初めにて、いと吉き日なりけり(十六日が彼岸の入りで裳着にはとても良い日和でした)。近うまた吉き日なしと\*勘へ申しけるうちに(その近くには他に吉日が無いと陰陽師が占い申して)、宮よろしうおはしませば(宮のお加減も宜しくいらしたので)、いそぎ立ちたまうて(殿は急ぎその日を裳着の日取りに御決めなさって)、\*例の渡りたまうても(いつものように対の姫のところにお渡りなさっても色事抜きで)、\*大臣に申しあらはしさまなど(藤大臣に姫の出自を打明けなさった時の姫を引き取ってから今までの経緯の筋書きを)、いとこまかに\*あべきことども教へきこえたまへば(行き成り藤原家に入る軋轢を避けようとしたことなどを織り交ぜて、実に緻密に辻褃の合う話として教え申しなさったので)、\*「ついたち」は「月立ち(つきたち)」の音変化と古語辞典にあり、だから「つひたち」ではないと知れる。そして朔月(さくげつ)は新月であり、陰暦で月の始まり、すなわち第一日目を示す。が、慣習上は「朔日」が<月の上

旬・初旬>を示すようだ。でなければ、「ころ」という幅は使えない。 \*「かんがへまうし」は注に<陰陽師の勘申。吉日を占う。>とある。 \*「例の渡りたまうて」は注に<源氏が玉鬘のもとに。>とある。 \*「おとどにまうしあらはししさま」は<内大臣にお打ち明けになった様子>と訳文にある。その簡素な書き方で読者が多くを感じ取ることは十分期待できる。かと思うが、「あらはししさま」を<打明けた様子>というよりも、源氏殿が実際に内大臣に<説明した通りの経緯>とまで補語して、こんな複雑な背景事情を余りに簡素に片付けられることに私は抵抗を示したい。 \*「あべきことども」は「あん(ん、る)べきことども」で、注には<御裳着の日に関する心得。>とある。恐らく、それは下文の「あはれなるみこころ」を「親心」のようなものと解して、それに繋がる意味を探しての読み方かと思う。が、殿の「あはれなる御心」は<今さらは色事抜きで、丹念に辻褃の合う話を考え抜いてくれたこと>に違いない。いや、それも勿論、源氏自身の為にしたことに他ならないが、対の姫にとっても都合の良い話立てだった、ということなのだろう。第一、式次第や様式の細かな注意は女房がするだろうに。もし、殿が教えるとしたら基本的な心構えくらい、かと思う。それが「いとこまかに」とあるのは、「裳着の心得」ではなく「大臣に申し頭はしし様」と齟齬が無いように緻密な順立てで、「あべいこと」はそれらの順立ての事柄に然るべき理由付けをつけた話で、例えばなぜ初めに藤原姫と主張しなかったのかの説明などを、殿は姫にじっくり教え聞かせたのだ。そう補語しないと、こんな無茶な設定を押し切る説得力に欠ける、と思う。例え実話だとしてもだ。

「\*あはれなる御心は(行き届いたお心遣いは)、親と聞こえながらも(実の親でさえ)、ありがたからむを(得難いだろうに)」 \*「あはれなる御心」については前項ノートで既に触れてしまったが、確かに注にあるように<玉鬘の心中。源氏に対する感謝の気持ち。>には違いないだろうが、「親心」と同質のものではない。挿入句に「親と聞こえながらも」とあるので紛らわしいが、この挿入句はいよいよ対面出来る藤原殿を意識したもので、姫が源氏殿と対比して考えている状態を示すものであり、意味として源氏殿の「あはれなる御心」に繋がるものではない。「あはれなる御心」は<深い思い遣り>で、此处ではむしろ<丹念な作り話>が内実だ。

と思すものから(と対の姫は源氏殿を親以上に尊くお思い為さるが)、いとなむうれしかりける(実の親に腰結いをしてもらえることは、何と言っても嬉しかったのです)。

かくて後は(その後に殿は)、中将の君にも(息子の中将にも)、忍びてかかることの心のたまひ知らせけり(密かにこうした事の事情を話してお知らせになりました)。

「\*あやしのことどもや(あの妙に親しすぎる気がしたことも是で、)。むべなりけり(納得できた)」 \*「あやしのことどもや」は注に<夕霧の心中文。「野分」巻の源氏と玉鬘の態度などをさす。>とある。野分巻第二章第四段に嵐の後に源氏が対の姫を見舞う場面で、同行して部屋の外に控えていた中将が二人の様子を覗き見て「(かく戯れたまふけしきのしるきを) あやしのわざや。親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは」と思った、という記事があった。なお、「や」は「なれど」に近い接続助詞を強調した言い方で<あの～についてだが>くらいの語感だ。だから、句点ではなく読点で「むべなりけり」に続けるべきだ。

と(と中将君は)、思ひあはすることどもあるに(理解出来ることもあるし)、かの\*つれなき人の御ありさまよりも(あの滅多に会えない藤原の二姫の御姿よりも)、\*なほもあらず思ひ出でられて(平然とはしてられない気分で対の姫の面影が思い出されて)、「思ひ寄らざりけることよ(異母姉と思っていた人が従姉だったとは思っても見ないことだった)」と、しれじれしき心地す(今までのことが馬鹿らしくなる気がしました)。 \*「つれなきひと」は注に<雲居雁をさす。>とある。藤原の二姫だ。尤も、対の姫は弘徽殿女御よりも年上で、歳から言えば三姫だ。対の姫 23 歳、弘徽殿女御 20 歳、

二姫 18 歳、ついでに源中将 16 歳、今上帝 19 歳、内大臣 43 歳、源氏殿 37 歳、というところ。ところで、「つれなし」は普通<冷淡だ、付き合いが悪い>という意味だと思うが、平静を装っているのは中将も同じではないのか。つまり、どちらから見ても相手が見境も無く熱心に求愛している、とは思えない客観状態だ。だから、相手を「つれない」と思っても無理は無いのかも知れないが、かと言ってお互いに好き合っちはいそうなので、かと言って疎遠であることだけは間違いないので、物理的に<滅多に会えない相手>という言い方に逃げた。この二人の関係は、内大臣に邪魔されていることだけは確かだが、その本当の気持ちみたいな所は実は良く分からない。丸二年はほとんど会わずに居るようだし、決して純愛を信じない心算はないし、内大臣に反抗して中将が平静を装う、というのも意地としては分かる気もするし、二姫も中将を信じるというのも有り得るだろうが、二姫は内大臣に大事にされていることに感謝している記事もあって、掴み切れ無い。\*「なほもあらじ」の「なほ」は<やはり、さらに、いっそう>ではなく<平、普通、平凡>で、「なほもあらじ」は<平気ではいられずに>ということのようだ。

されど(されど対の姫が実姉で無いとしても父の愛人であり情欲を向けるのは)、「あるまじう(あってはならない)、ねじけたるべきほどなりけり(捻じ曲がったというべき気持ちだ)」と、思ひ返すことこそは(と考え直すところは)、\*ありがたきまめまめしきなめれ(稀に見る実直さのようです)。\*「ありがたきまめまめしきなめれ」は語り手による中将の生真面目ぶりをからかい気味に言う口調に見える。こういう階層の貴公子は種付けが富の再分配を促進する大事な役目なのだという認識が、当時の宮廷女房たちの常識だったのかも知れない。

## [第二段 二月十六日、玉鬘の裳着の儀]

かくてその日になりて(こうしてその当日になって)、三条の宮より(三条の大宮から)、忍びやかに御使あり(控え目にお祝いの御使いがありました)。御櫛の笥(みくしのはこ、化粧道具箱)など、にはかなれど(急なことだったが)、ことどもいときよらにしたまうて(中の道具もとても綺麗な品々を用意されて)、御文には(おんふみには、お手紙には)、

「聞こえむにも(お祝いを申し上げるのも)、\*いまいましきありさまを(憚られる尼姿なので)、今日は忍びこめはべれど(今日は伺わずに家に籠もっておりますが)、\*さるかたにても(そうは言っても、家族に先立たれて尼姿で生き長らえているこの身を)、長き例ばかりを思し(長寿家系の生き証人とだけお考え頂き)許すべうや(其れに免じてお許し頂けるか)、とてなむ(との思いで、筆を取りました)。\*「いまいましきありさまを」は注に<尼姿であることをいう。「を」接続助詞、原因理由を表す順接の意。>とある。必脚だ。こういう文は私には難文で、こういう説明が無いと意味が分からない。「いまいまし」は<不吉だ、縁起が悪い>で祝儀には不相応のことのようだが、仏門に入ることが死者を弔う身を意味し、死は穢れとして忌み嫌う、といったような考え方に拠るのだろうか。穢れの祓えは神道の業で、仏教者に清めは出来ない、とでも言うのだろうか。それが日本式の棲み分けのような印象は確かに今でもあるが、突き詰めた意味というよりも、尼僧ならではの謙遜した挨拶文くらいに取るべきかも知れない。\*「さるかたにても」は注に<尼姿であることをさす。>とある。「さるかたにても」自体は<それにしても、そうは言っても>だろうと思って、この注釈には積然としなかったが、この文は「さるかたにても長き例ばかりを思し」の一文で<家族に先立たれた尼姿とは言えその長生きの面だけを吉とお考え頂き>という文意になるようで、納得できた。「例(ためし)」は<参照例、先例>だが、「長し」に<長寿>の意味があって、「長き例」で<長寿の家系>となるのだろう。

\*あはれにうけたまはり(あなたの母御が源氏殿と藤原殿の両方と情を通じていたという事情を、深く感じ入ってお聞き致し)、あきらめたる筋をかけきこえむも(私の方からはっきりした父親との関係を言い立てますのも)、いかが(どうなのでしょう)。御けしきに從ひてなむ(貴方の御意向に沿うように致そうと思います)。\*「あはれにうけたまはり」の対象が分からない。が、下に「あきらめたる筋」とあるのが手掛かりだ。「あきらむ」は「明らむ」で<物事をはっきりと見定める>と古語辞典にある。さらに、その延長で<心を明るくする、心配をしなくする>という意味になるようだ。現代語で「あきらめる」と言う<諦める>と表記され<断念する>の意味になるが、この「諦(てい・たん)」も元々は<真理を見極める、悟りを開く>という意味らしい。何しろ束ねて纏めて牛耳る「帝」をツクリに持つ字だ。だから、「諦める」も本来は<断念する>ではなくて<ある懸念を纏めて打ち切る→超然とする→平静を取り戻す>という語感で、それが日常語では説明が面倒なので<忘れる→断念する>という意味で使われているのだろう。ともあれ、此处で言う「あきらめたる筋」は<はっきりした父親>であり、それが<はっきりしていない>ということは<女が複数の男から受精した>ということであり、それは<姫の母親が源氏殿と藤原殿の両方と情交した>という事情であり、その事情を大宮は源氏殿と藤原殿から「あはれにうけたまは」ったワケだ。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛笥、わが身はなれぬ懸子なりけり」(和歌 29-05)

どちらの御子と言ったとて、私の孫に変わりなし」(意識 29-05)

\*「ふたかた」は<源氏と藤氏>で化粧箱の<蓋>に語呂合わせしてある、と注にある。「蓋の方」とは<終りの方>だろうか。「言ひもて行く」は<突き詰めて行く>ということらしく、「ふたかたに言ひもてゆけば」は<結論を煎じ詰めれば>という言い方のようだ。「玉櫛笥(たまぐしげ)」は<櫛入れ>だが、「たまぐしげ」を「玉串(たまぐし、神に供えるサカキの枝葉)」「げ(～のよう)」と見れば<神の領域→神のみぞ知る>みたいな言い方にもなりそうだ。とすれば、「ふたかたに言ひもて行けばたまぐしげ」は<父親は本当の所は分からない→どっちだって構わない>という意味かも知れない。「かけご」は「懸け籠(本体に懸ける付属の籠)」とあり、「わが身はなれぬ」で<本体の「御櫛の笥(化粧箱)」に付いている付属の「玉櫛笥」>という言い方になっている。勿論ははお祝いの化粧箱に洒落た言い回しで、歌意の「我が身離れぬ懸け子」とは<私の親愛なる身内の子(孫)>と優しく呼び掛けているわけだ。

と、いと古めかしうわななきたまへるを(とても古めかしい文句で震えた字の文面を)、殿も\*こなたにおはしまして(殿も西の対にいらして)、ことども御覧じ定むるほどなれば(用意された式典用の品々を御覧になって使う物の品定めをなさっていらしたので)、見たまうて(宮のお手紙を御覧なさり)、\*「こなた」とは何処か。対の姫がいるのは夏の御殿の西の対だが、この日は裳着当日であり、その会場は「風俗博物館」サイトの「六条院拝見」トピックの「視点を変えてみる「春の御殿」」コーナーの「裳着」ページに<春の御殿の母屋>が設定されているので、其れに従い、春の町の寝殿を舞台と想定する。しかし、裳着は深夜に行われると「風俗博物館」サイトに解説されているので、今は西の対で姫や部屋女房たちが衣装合わせや道具類の準備をしているらしい。其処に殿も来合わせていた。それにしても、殿が姫宛の大宮からの手紙を見る、とは内覧を許された太政大臣らしい所業、というより、式典執行の責任者として贈り物を検める管理責任と権限が家長にはある、という内覧の原義みたいなことなのかも知れない。ともかく、そういったような場面なのだろう。

「\*古代なる御文書きなれど(こたいなるおんふみがきなれど、正統な御歌詠みだが)、\*いたしや、この御手よ(痛々しい御筆跡だ)。昔は上手にもものしたまひけるを(昔は美しい字をお書きに成ったが)、年に添へて(歳を取るほど)、\*あやしく老いゆくものにこそありけれ(どうしても衰

えてゆくものようです)。いとからく御手ふるひにけり(とても酷く御手が震えています)」\*「古代なる御文書き」は<古風な文面>のように見えるが、それだと「古めかしうわななきたまへる」を重ねる記事になってしまう。となると、「古めかしうわななきたまへる」の方が<古風な文面>ではなく、正に視覚上の<古い字体で震えて書かれている手紙>のことなのかも知れない。しかし、大宮の文面のまどろっこしさを敢えて書いたであろう上文の記事を見る限り、「古めかしうわななきたまへる」は<古めかしい、もしくは与謝野訳文にあるように、老人らしい、まどろっこしい言い回しで震えた字の手紙>と読んだ方が面白い。となると、「古代なる御文書き」を<古風な文面>などと、「古めかしうわななきたまへる」と同じ意味のことをより詰まらない書き方にしたようなものと読むのは、どうにも詰まらない。ところで、注には<『完訳』は「古風な筆跡。一説には、掛詞。縁語を多用した古風な詠みぶり」と注す。>とあり、その「一説」が面白そうなので従う。少し邪道気味だが、「御文書き」は<御歌詠み>で、「古代なる」は「なれど」の逆接が効果的になるような、形式では高評価の、しかし歌心表現の中身の薄さに対しては皮肉っぽい言い方で<正統な>という意味の文、と考えたい。下文の「うち返し見たまうて」で歌の中身の詠みつづりを褒めているのだから、「古代なる御文書き」がその概観上の<正統な御歌詠み>を意味する、という読み方に構文上の説得力はあるだろうし、そう読んでの「一説」注釈なのだろう。\*「いたし」は注に<『集成』は「大したものだ。『完訳』は「おいたわしいことですね」と訳す。>とある。「甚し」か「痛し」か、という違いだが、これは逆接の「なれど」を受けた感想だから、「古代」を<時代遅れ>と読むか<正統な>と読むか、の違いに拠る訳だ。「古めかし」を<古い、年老いた>と読み、「古代」を<正統な>と読む方が面白いとは、前項ノットに記した。従って、私は『完訳』説に従う。\*「あやし」は<不可解だ、変だ>などだが、此处では<不本意に、不可抗力で、どうしても>くらいの語感、かと思う。

など、うち返し見たまうて(何度も読み直しなさって)、

「よくも玉櫛筥にまつはれたるかな(よくも此処までタマクシゲにまつわる語で歌詠みなさったものだ)。三十一字の中に(みそひともじのなかに、短歌で)、\*異文字は(こともじは、縁語以外を)少なく添へたることのかたきなり(少なくするのは難しいものですからねえ)」\*「異文字は少なく」は注に<『集成』は「一首のうちに、玉櫛筥に縁のない言葉を少ししか使わずに詠むというのが大変なのだ。暗にからかった言葉」と注す。>とある。「暗にからかった言葉」と言うのなら、「いたし」を<甚し>と読むのは奇怪しいと思うが、「からかつ」ている言い方は同意する。

と、\*忍びて笑ひたまふ(密かにお笑いなさいます)。\*「\*忍びて笑ふ」は注に<『完訳』は「「忍びて笑」うのは、本心では揶揄。後続の、末摘花の「唐衣」に執する表現ともかかわっている」と注す。>とある。殿の行動描写ではあるが、それに同感するか宮廷女房の、こうした王家筋に対する親しさのある語り口は、彼女たちの日常感覚に依るものなのかと思うと興味深い。

### [第三段 玉鬘の裳着への祝儀の品々]

中宮より、\*白き御裳(おんも)、唐衣(からぎぬ)、御装束(おんしゃうぞく、内着類)、\*御髪上の具(みぐしあげのぐ、整髪道具)など、いと二なくて(またとない素晴らしいもので、例の(慣例どおりに)、壺どもに(数々の壺に)、唐の薫物(唐製の上等な薫香練物)、心ことに香り深くてたてまつりたまへり(特に香りの深いものを選んで御贈り下さいました)。\*「唐衣装(からぎぬも)」については、例によって「風俗博物館」サイトは「貴族の生活」トピックの「装束」コーナーの「装束(女性)」ページに<女房装束>として紹介されている画像と文が非常に参考になる。\*「御髪上の具」については、「風俗博物館」電子公

開文の「六条院拝見」目次項目の「視点を変えてみる「春の御殿」特集の「裳着」表示面の7番図にく裳着と同時に額の前髪を上げる「髪上」が行われる。正面に平額という飾りをつけ、その下に櫛を挿し、筭・釵子と呼ばれるピンのようなものでとめる。>と説明がある。これらの「風俗博物館」サイトの親切な解説ページが無かったら、私などはいくら文字をなぞっても、これらの文章から具体像は全く描けない。

御方々(その他の六条院の御夫人方は)、皆心々に(皆各々の考えで)、御装束(姫の御着物や)、人びとの料に(その女房たちの衣装から)、櫛扇まで(くしあふぎまで)、とりどりにし出でたまへるありさま(多種多様に用意なさって会場に広げられた品々は)、劣りまさらず(何れ劣るとも勝らず逸品揃いで)、さまざまにつけて(それぞれに)、\*かばかりの御心ばせどもに(是こそが相応しいとの御審美眼を)、挑み尽くしたまへれば(競い尽くし合いなされたものなので)、をかしう見ゆるを(見応えがありました)、東の院の人びとも(二条東院の夫人たちも)、かかる御いそぎは聞きたまうけれども(この裳着の御準備があることはお聞きなされていたものの)、訪らひきこえたまふべき数ならねば(お祝い申し上げるべきとの殿からのお知らせもないので)、ただ聞き過ぎしたるに(出過ぎないようにと、ただ聞き流していたが)、常陸の宮の御方(ひたちのみやのおんかた、である末摘は)、\*あやしうものうるはしう(変に律儀に)、さるべきことの折過ぐさぬ古代の御心にて(こうした祝儀の儀礼を欠かさない昔風のお考えで)、いかでかこの御いそぎを(如何してこのご準備を)、よそのこととは聞き過ぐさむ(他人事として聞き過ごせようか)、と思して(と御思いになって)、\*形のごとなむし出でたまうける(型通りの御祝いを贈って寄越しなさいました)。 \*「かばかりのみこころばせ」は<これぐらい>が丁度良いだろうという<御判断>。何に何が「丁度良い」のかと言えば、裳着用衣装と道具に、各夫人が選んだ品々が、だ。 \*「あやし」は<怪しい、不審だ>で、「あやしう」は<変に>。「ものうるはし」は<律儀だ>。 \*「かたのごと」は<形式通り、型通り>。

\*あはれなる御心ざしなりかし(まったく御丁寧な御心遣いだよなあ)。 \*この文は注に<『集成』は「殊勝なお心がけではある。諧謔気味に、その出過ぎた態度を皮肉った草子地」。『完訳』は「語り手の評。末摘花の出過ぎた無用の行為を嘲弄する」と注す。>とある。が、注記すべきことの要点は、「かし」が<ですよね>の念押し・同意強要、または<なのになあ>の突き放し・不満示唆などを意味する終助詞であることから、「あはれなる」の<心に沁みる>という言い方が皮肉を込めた言い回しの<大きなお世話の>という意味になる、という文法上の指摘、のように思う。で、その皮肉っぽい<大きなお世話>のことは「まったく御丁寧な」などと現代語の言い回しでは言う、ように思う。

\*青鈍の細長一襲(青ねずの簡易上着の単衣仕立物に)、\*落栗とかや(落ち栗色とか)、何とかや(何とか言う季節外れのもので)、昔の人のめでたうしける(昔の人が珍重したような)袷の袴一具(あはせのはかまいちぐ、合わせ仕立ての袴を一つと)、紫のしらきり見ゆる\*霰地の御小桂と(紫地に白い斑点が見えるアラレ模様の御着物とを)、よき衣笥に入れて(立派な衣装箱に入れて)、包みいとうるはしうて(体裁をととても丁寧に整えて)、たてまつれたまへり(差し上げ申しなさいました)。 \*「あをにびのほそながひとかさね」は注に<『集成』は「多く喪中、または僧尼が着用し、祝儀には適切でない」。『完訳』は「祝儀に凶事用の「青鈍」とは無神経。「細長」は女のふだん着」と注す。>とある。確かに、「青鈍」はこの物語でも<喪服>として何度も衣装描写されて来たし、「細長」は錦地の美しい織物ではありそうだが、ほとんど生地そのまま飾り布として羽織る印象の簡略服ないし子供服のようで、だとすると、是を贈る末摘の見識は本当に常軌を外して、信じ難いほどだ。尼の大宮を族長と意識したものだとしても、裳着の祝いに姫に宛てて贈るものとしての妥当性は皆無だ。是は滑稽な描写を通り越して、嫌悪すべき異常ささえ感じさせるも

ので、この解釈で良いのかどうか不安になるほどの極端な語り口に見えるが、だからこそその滑稽さだとしたら、随分とベタな見下し表現だ。\*「おちぐり」はざっと栗の実の皮の色で<茶色、こげ茶色>のことらしいが、「かさねの色あわせの名前」でもあり、その場合は表地は赤で裏地が薄茶色の薄手の袷織物のようだが、落ち栗の名前からしても秋の色使いで、この二月の春の色では無い。\*「あられぢ」は小紋柄の模様らしいが、「霰」は冬の季語とある。全てが的外れだ。

御文には、

「知らせたまふべき数にもはべらねば(お見知り頂くべき価値もありません者なので)、つつましけれど(憚られますが)、かかる折は\*思たまへ忍びがたくなむ(こうしたお祝い事はどうしても知らん顔できなく、存じます)。これ(これは)、\*いとあやしけれど(真に詰まらない物ですが)、\*人にも賜はせよ(女房にでもお与え下さい)」 \*「思たまへ」は読みも「おもたまへ」で「おもひたまへ」の音便なのだろうが、話し言葉ではなく手紙文だから<つい舌足らずの発音に成った>ものではなく、意図して<思わず感じますに→つい思いますに→ど(う)しても>という意味で使っている言葉なのだろう。「忍びがたくなむ」は「はべる」の省略で、是も<思わず>の切迫感を出す表現のようだ。\*「いとあやしけれど」は逐語なら<良く分からないが>で、文意としては<これらの品はお気に召すかどうか、はなはだ疑問なのですが>くらいで、それは現代語の言い回しでは、確かに訳文にある通り<実につまらない物ですが>だ。\*この「人」が<女房たち>というのは、私には直感できない。こういう所は本当に訳文に感心する。

と、おいらかなり(文面だけは尤もらしい)。殿(殿はその手紙を)、御覧じつけて(見つけなさって)、いとあさましう(なんという場違いな真似を)、例の(いつものようにするものだ)、と思すに(とお思いなさると)、御顔赤みぬ(お顔が赤くなります)。

「あやしき古人にこそあれ(奇妙で時代遅れの人ですnee)。かくものづつみしたる人は(あのように本心を隠して言わない人は)、引き入り沈み入りたるこそよけれ(引き籠って出て来なければ良いのに)。さすがに恥ぢがましや(こんなことをして赤恥ものだ)\*とて(というものの)、「返りことはつかはせ(お返事は差し上げなさい)。はしたなく思ひなむ(常陸宮の御方が惨めに思うでしょう)。父親王の(ちちみこの、故常陸宮が)、いとかなしうしたまひける(とても愛していらしたことを)、思ひ出づれば(思い出せば)、人に落さむはいと心苦しき人なり(人より下位に置くのはとても心苦しい人なのです)」 \*「とて」は、<ということで>という順接と、<かといって>という逆接とがある助詞で、此处では逆接。

と聞こえたまふ(と殿は姫にお話なさいます)。

御小桂の袂に(紫地の御着物の袂に)、例の(例によって)、同じ筋の歌ありけり(いつもと同じ詠み方の歌が書かれていました)。

「わが身こそ恨みられけれ唐衣、君が袂に馴れずと思へば」(和歌 29-06)

「この御着物は届いても、私は遠く思うだけ」(意識 29-06)



\*注にく末摘花から玉鬘への贈歌。『完訳』は「顧みない恋人を恨む発想で、祝儀には場違いの表現」と注す。>とある。確かに、歌意に姫を祝う気持ちは見えない。まるで末摘が冷たい源氏殿に対して詠んだ恨み節のようでもある。それでも、形式的にでも是が対の姫に宛てた歌として成立していることだけは見ておく。「唐衣」は正装の「からぎぬ」ではなく、衣服に対する美称の「からころも」なので、「御小桂の袂」に添えた色紙の歌として其の「小桂」のことになる。「うらみ」も「裏身→内着」に掛かるのだろうか。この人は「きみ」を「着る身」として「唐衣」に関連付けるクセがある。「袂に馴れず」は<近付けない>でもあり<着て貰えない>でもある。ざっと、「貴方にこの着物を着て頂けないと残念です」という挨拶文には成っていそうだ。

御手は(御筆跡は)、昔だにありしを(昔でさえそうだったが)、いとわりなうしじかみ(何ともむやみに縮こまって)、彫深う(くっきりとした線の)、強う(強い筆圧で紙を押した)、堅う書きたまへり(無骨な堅い字体でお書きになっていらっしやいました)。\*大臣(おとど、殿は常陸方の世慣れない拙さに)、憎きものの(嫌悪したが)、をかしさをばえ念じたまはで(その滑稽さをこそ抑えきれずに)、 \*源氏殿をこのように、私的な「殿」ではなく公的な「大臣」と呼ぶのは、作者に末摘の<社会性の無さを非難する意図>があるのだろう。

「この歌詠みつらむほどこそ(この歌の詠みっぷりと言ったら、)。まして\*今は力なくて(以前にも増して今は助言者も居ないので)、\*所狭かりけむ(変わり映えしないようだ) \*「今は力なくて」は注に<手助けしてくれる人、の意。かつては侍従などがいた。>とある。 \*「ところせし」は物理的に<窮屈だ>でもあるが、心理的に<窮屈だ→引き出しが少ない→一本調子だ>でもある。

と、\*いとほしがりたまふ(残念がってみなさいます)。 \*「いとほしがる」の「がる」は<~のようにする>だが、是は不意の場合と作為の場合のどちらでも使う語で、此处ではおよそ意図したものだろう。

「いで(よし)、この返りこと(この返事は)、騒がしうとも(式の準備で取り込み中だが)、われせむ(私が書こう)」

とのたまひて(と仰って)、

「\*あやしう(むやみに)、人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ(他の同じような立場の人が考え付かないようなお心配りなどは)、あらでもありぬべけれ(しなくても良いのです)」 \*「あやし」はこの段に於いて非常に多用される語だ。そして、非常に含みの多様な語だ。およそ<不可解な、不審な、変な、異常な>といった意味合いのようで、今でも不都合な行為をする者に対して「ヘンなマネするな」と注意するのは日常語だが、より相手にとって理屈の上で説得力がある言い方としては<自分だけの思い込みで勝手なことをするな→周りの状態を良く見てむやみに行動するな>となりそうだ。

と、\*憎さに書きたまうて(皮肉っぽくお書きになって)、 \*「憎さに」は訳文では<憎く思って、嫌悪して>と解しているようだが、私には「憎し様に(憎憎しげに)」を軽妙な語感で使ったもののように見える。確かに、「憎さ」は「憎し」を客体視した名詞形にも見えるが、「あやしう~ありぬべけれ」の文からは、私は怒りや非難ではなく皮肉を感じる。

「唐衣また唐衣唐衣、かへすがへすも唐衣なる」(和歌 29-07)

## 「唐衣そして唐衣、何に着けても唐衣」(意識 29-07)

\*注に<源氏の返歌。「唐衣」と「返す」は縁語。『完訳』は「末摘花を、「憎さ」ゆえに愚弄した歌。「唐衣日もゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき」(古今・恋一 読人しらず)の名高い歌があるだけに、奇妙な歌ながら一応の体をなしている」と注す。>とある。「一応の体」とあるが、この参照句は古今集12巻の515番の歌で、例によって「古今和歌集の部屋」サイトの同ページの解説によると、<衣の縁語として「紐結ふ」を“日も夕”に掛け、衣をたたむ時に折り返すということ、を、“返す返す”に掛けている。>とあり、この句自体が「唐衣」のお題に「返す」を洒落込んだ言葉遊びの趣きなのであり、是を良く知られた下敷きとするなら、その社会的評価という世情を踏まえた一才の大喜利芸とも言えそうだ。では、返歌として成立しているのかと言えば、文字通り「返す返すも」と形式上は意味を成している。しかし、歌意は無い。言葉遊びだが、その遊び気分を理解出来ない者にとっては、侮りとも愚弄とも受け取られかねない、という面はあるかも知れない。しかし、そう取られたとしても源氏殿は一向に構わないし、常陸方がそれで落ち込むほど純情でないことも分かっている。

とて(として)、

「いとまめやかに(本当にこの贈歌を真に受けて)、かの人の立てて好む筋なれば(あの人が歌詠みで好む趣向で)、ものしてはべるなり(返歌を作って見ました)」

とて、見せたてまつりたまへば(殿は姫にお見せなさると)、君(姫君は)、いとにほひやかに笑ひたまひて(それはにこやかにお笑いなさって)、

「あな、いとほし(まあひどい)。弄じたるやうにもはべるかな(お方を愚弄したようにも見えますが)」

と、苦しがりたまふ(困って見せなさいます)。\*ようなしごといと多かりや(式の準備と言っても、このような遊び半分を進める事柄がととても多いという、和やかで余裕のある六条院の当日の日中なのでした)。\*「ようなしごと」は注に<『集成』は「「ようなし」は、用無し。末摘花が登場する滑稽な一段はこれにておしまい、といった気持の草子地」。『完訳』は「語り手の言辞。不用な話をはさんだとして、物語の本流に戻る。玉鬘の装着を控え、幕間狂言のような末摘花の登場」と注す。>とある。なので、その段落をより一層明示する、「当日の日中」場面を締めくくる補語を加えた。

### [第四段 内大臣、腰結に役を勤める]

内大臣は(内大臣は重役なので)、さしも急がれたまふまじき御心なれど(平素はそれほどお急ぎ為さる必要のない御心構えでしたが)、めづらかに聞きたまうし後は(対の姫が自分の実の娘という話を滅多に無い事とお聞きなされた後は)、いつしかと御心にかかりたれば(いつ会えるものかという御気持ちが動いて)、疾く参りたまへり(早く六条院に参上なさいました)。

\*儀式など(腰結い役の内大臣を迎える段取りなどは)、\*あべい限りにまた過ぎて(丁重の上にも丁重で)、\*めづらしきさまにしなさせたまへり(源氏殿は今までに無い尊敬の念を以って内大臣を控えの間にご案内させなさいました)。「げにわざと御心とどめたまうけること(確かに特別なご配慮を為さっているようだ)」と見たまふも(と内大臣は源氏殿のことを考えなさって)、か

たじけなきものから(有難く思いながらも)、\*やう変はりて思さる(以前との違いを何処か奇妙に思われ為さいます)。\*「儀式」は<一定の作法・形式にのっとり行われる集团的行事。慶弔に際して行われる行事や組織体が行う行事など。>と大辞林にある。だから、普通に考えれば「儀式」は<裳着本番のこと>を言っているように思えるが、話の流れからして今の場面は式次第が始まる前の控え室での内大臣の様子かと思われ、だとすると、この「儀式」は<裳着執行全体の段取りの一つとして内大臣を控え室に迎えること>と考えるべき、のように見える。\*「あべい限りに」は「あるべき限りに(最大限に)」の音便だが、「儀式」が<内大臣への接待>だとすれば「最大限に」は<最上の接待>を意味し、そういうものは<丁重に>という言う。\*「めづらし」は<愛すべき>とか<目新しい>とかの「目を引く」語感で、此处では<珍重すべき→今までに無く大事にする>と解したい。「さま」はそういう<内大臣に対する接待の仕方>であり、それを殿は家人に「しなさせたまへり」と読んで置く。\*「やう変はりて」は<様変わりしたものとして>ということだろうが、この対象体は何か。それは「見たまふも」と主題付けされた、「御心(源氏殿のお考え)」だ。ということは、藤殿は源殿の<心境の変化>を感じ取った、ということだ。そして、その「御心」を一方では「かたじけなし」と受け入れるべく思う「ものから(ながらも)」、他方で<用心すべきもの>とその「心境の変化」を感じている、という構文だ。だから「疑心」と読んで、<何処か奇妙に>と補語する。「思さる」の「る」は受身の助動詞で<そう思わされる>。とまあ、以上が合理的な読み方だと私は思うが、だとすると、此处の文は、クセのある単語の使い方と曖昧な言い回しのかたまりで、如何してこんなに分かり難い書き方をしたのかが不思議なほどで、かなりの難文だし、読み間違えの危惧も残る。

\*亥の時にて(夜の十時に)、\*入れたてまつりたまふ(源氏殿は内大臣を会場の主殿母屋の御簾内にお入れ申し為さいます)。\*「あのととき」は干支の十二支を今の時計に当てはめれば<夜の十時>、また幅を持たせれば<夜の十時から十二時まで>。だが、当時は日の出日の入りによって朝と夜の長さが決まるので、季節ごとに実際の一刻は今の2時間より長かったり短かったりするし、精密な機械式の時計もないので、語感としては<真夜中>とか<真夜中少し前>くらいなのだろう。が、分かり易さを狙えば<夜の十時>でも良いだろう。\*「入れたてまつりたまふ」は注に<源氏が内大臣を御簾の内に。>とある。「御簾内」とは<春の御殿の寝殿の母屋>と考えて良いのだろうか。そういう常識のない私には、不親切な注釈だ。だから私は自分が分かるように、それを明示して補語する。

例の御まうけをばさるものにて(会場は裳着の為の飾り付けは当然の事として)、内の御座(うちのおまし、内大臣のお席は)いと二なくしつらはせたまうて(それはこの上なく立派に整えさせなさっていて)、御肴(みさかな、接待の御酒肴を)参らせたまふ(給仕させなさいます)。御殿油(おんとなぶら、室内灯は)、例のかかる所よりは(通常の場合よりは)、\*すこし光見せて(少し明るめにして)、をかしきほどにもてなしきこえたまへり(姫の姿がより美しく見えるように殿は演出申しなさいました)。\*「すこし光見せて」は注に<『完訳』は「父娘対面のために明るくした。薄明に玉鬘が映える。以前の螢の光に照らした趣向に類似」と注す。>とある。となると、「をかし」に源氏殿の興味心を読み込むべきにさえ思えるが、「もてなしきこえ」を素直に取って、この「をかし」は姫の姿が良く見えて、その美しさが<趣き深い>のだと読んで置く。

\*いみじうゆかしう思ひきこえたまへど(内大臣は心底から姫の顔を見たいと思い申しなされたが)、今宵はいと\*ゆくりかなべければ(今夜は祝儀の式進行に従わなければならないので、)、引き結びたまふほど(腰結いの紐を結ぶ時も、姫の顔を見ることが出来ずに)、\*え忍びたまはぬけしきなり(とても気持ちを隠しきれずに高ぶりなされた様子でした)。\*「いみじうゆかしう」は注に<内大臣は玉鬘の素顔を見たく思う。しかし玉鬘はこのような儀式の折には扇で顔を隠している。>とある。と

なると、腰紐を結ぶ為藤殿が姫に近付いても顔は見えない、というじれったさだ \*「ゆくりか」は<急なさま、俄かなさま>と古語辞典にあるが、「行くり」は<物事が勝手に進んでしまうありさま>の語感だから、此処では<式次第の進行に沿って>という意味かと思う。「なべければ」は「なるべければ」の音便で、この「なるべし」は<当然に、義務でそうなる>だから、「なべければ」は<しなければならぬ>。 \*「え忍びたまはぬ」は如何にも源氏殿の興味心に即した語り口に思える。勿論、内大臣が姫をどう思うのかは読者の興味でもある。そして読者は、いや私は、内大臣がこの姫を世話してきた源氏殿をどう思うのか、にこそ興味があり、それこそがこの物語の核心に関わる事項だと思っている。

主人の大臣(あるじのおとど、源氏殿は)、

「今宵は(今夜は祝儀の場なので)、\*いにしへさまのことは\*かけはべらねば(故人である母親のことには私は触れませんので)、何のあやめも\*分かせたまふまじくなむ(あなたも詳しい事情はお知りでは無いようになさって、)。心知らぬ人目を飾りて(あなたが姫の親であることを知らない他の人たちの手前)、なほ世の常の作法に(どうか普通の作法に止めて、姫には何も話し掛けずにいらして下さい)」 \*「いにしへさまのこと」は注に<亡き夕顔に関すること。祝儀の場なので忌んだ。>とある。となると、<古い経緯>ではなく<故人である母親のこと>とするべきか。 \*「かく」は<心にかけて思う>だが、何かに関して<言葉に出して言う、言い掛ける、言い出す>ということでもあるようだ。そして、この「かけはべらねば」が<私は言わないので>という言い方だから、下の「まじくなむ」は<あなたも～ではないようにしてください>ということになる。 \*「わかせたまふまじく」は注に<主語は、あなた内大臣。「せたまふ」は二重敬語。>とある。ただ此処での要点は、「まじく(～ではないように)」という言い方と、「なむ(なさって)」で下文に続き、「作法に」の後に「止めたまへ」などが省略されている、という事かと思う。

と聞こえたまふ(と内大臣に申し上げなさいませう)。

「げに(確かに)、さらに聞こえさせやるべき方はべらなむ(何も話しかけ申すことは御座いませんので)」

\*御土器参るほどに(とて内大臣は御酒を召し上がるほどに)、 \*「おんかはらけまあるほどに」は地文だろうに、その前の口語文を受ける助詞の「とて」が無い。もしや上文が口語文ではないのかとも考えたが、「はべらなむ」の「なむ」は会話文に於いて<～ですので>と説明口調で答える言い方のようで、これは内大臣の発言と見るべきなのだろう。で、此処に「とて」を補語する。

「限りなきかしこまりをば(この度の腰結い役を与えて頂いたことには、言葉に尽くせぬ御礼の気持ち)、世に例なきことと聞こえさせながら(世に例のない有難いお計らいと申し上げますものの)、今までかく忍びこめさせたまひける\*恨みも(今までこのように我が娘をこのお邸にひた隠しなされていたことへの無念さも)、いかが添へはべらざらむ(どうして併せて抱かずに居られましようか)」 \*「うらみ」は<恨み、憎しみ、怒り、不満、嘆き、残念さ、不審、疑念>などで、どう見ても相当なこだわりの感情であり、酔った勢いでつい本音を吐いた、ような書き方ではあるが、実は藤殿は源殿から何処まで詳しい事情を聞かされているのか明示されていないので、この「恨み」がどのようなものなのか焦点は絞れない。根深い「恨み」だとしたら、深刻な問題とも言えそうだが、正妻とは別腹の隠し子の出現は藤原家の内情の平安とも絡む事柄だし、余り単純構造で藤殿が源殿を直線的に「恨む」というのも疑問ではある。それに、下文先読み

だが、次の歌が「恨めしや」で始まる姫宛のものなので、その語句を導く枕としての洒落心の面はありそうで、であれば、この「恨み」は、源氏殿の説明ではだが、藤原姫たる出自を主張しなかった愛娘に対する〈不憫さ〉さえ含まれているようにも見える。それでも、不満な気持ちなのは確かなので、無難なく無念さ〉と言い換えて置く。

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。

「恨めしや沖つ玉藻をかづくまで、磯がくれける海人の心よ」(和歌 29-08)

「今日まで会えなかったとは、本当に不思議で残念だ」(意識 29-08)

\*注に〈内大臣の贈歌。「浦」「恨」、「藻」「裳」、「潜く」「被く」の掛詞。「浦」「沖」「藻」「潜く」「磯」「海人」は海に関する縁語。『完訳』は「玉鬘を「海人」に見たてて、今まで名のらなかった不満を言う。源氏への恨みも、この儀礼的な贈答歌に託すほかない」と注す。〉とある。注釈に習って読み砕くと、源氏殿並の教養人ぶりを見せる藤原殿の技巧を凝らした歌に思える。海尽くしの遊び歌として娘に出会えた喜びを「恨めしや」という深い感情を示す言葉で表す詠みっぷりは、注には「儀礼的な贈答歌」とあるものの、私のような素人目には秀逸だ。尤も、率直な感情を訴えたものではないので言葉自体から感慨は伝わらない。理詰め之歌ではあるのだろう。そこがまた、源殿に似た教養人らしさを思わせる。そういう作者の計算を感じるが、意識は古語ならではの洒落言葉までは汲めないで、いっそ率直に言ってみた。「うらめしや」は「恨めしや(無念だ、不可解だ)」と「浦見しや(海を見渡せば)。「おきつ」は「沖つ(沖の)」と「掟つ(定められた)」。「たまもをかづく」は「玉藻を潜く(潜って良い海草を探す)」と「玉裳を被く(裳着式を挙げる)」。「磯隠る」は文字通り〈海辺の岩陰に隠れる〉だが、人間の組織社会から見て野趣は粗野に通じ〈田舎に隠れ住む〉とも意味するらしい。「あま」は「海人」だが、「尼」でもあり、「尼」は仏僧でもあるが、「尼削ぎ」のオカッパ頭に準えて〈童女〉を言うこともあると古語辞典にあるので、藤殿はそういう意味で「我が子」に語りかけたのだろう。実年では姫は23歳と、通常の成人式を上げる12,3歳からは10歳も歳を食っていて、とても童女とは言えないが、いくつになっても子供は子供、という言い方からすれば、この成人式にせめて形の上だけでも「大人になる前」に一度はそう呼んでみたい、という実父の心情は泣かせる筋だ。で、歌筋は「本当に分からないよ、こうして立派な裳着を挙げるまで田舎に隠れ住んで、まるで岸から遠く眺める沖で海に潜って探さなければ会えないほどに身を隠していた我が子の気持ちは」というところかと思う。

とて、なほつつみもあへずしほたれたまふ(やはり抑え切れずに涙ぐみなさいます)。姫君は、いと恥づかしき御さまどものさし集ひ(非常に高い位で気後れするほどの御二方が近くにお揃いでいらっしゃる)、つつましさに(畏れ多さに緊張して)、え聞こえたまはねば(とてもお返事申し為されないの)、殿(源氏殿が)、

「よるべなみかかる渚にうち寄せて、海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し」(和歌 29-09)

「あてなくさまようこの身には、今日の裳着など夢の夢」(意識 29-09)

\*注に〈源氏の返歌。「寄る辺無み」「寄るべ波」の掛詞。「藻屑」に「裳」を響かす。「寄る」「波」「渚」「寄せ」「海人」「藻屑」は海に関する縁語。内大臣を「海人」に、玉鬘を「藻屑」に喩える。自分源氏は「渚」に喩えている。『集成』は「「かかる渚」は、源氏の卑下の言葉」。『完訳』は「実父内大臣の無責任を難じて自分の恩恵の広大さを主張する」と注す。〉とある。『完訳』の解釈は「海人も尋ねぬ」を〈あなたが探さないから〉と読んでのことと思うが、またそういう事情を内大臣に認識して欲しいという意図は確かに在るように感じるが、実情

としては右近を通じて幼い撫子の住処を光君は知っていたし、その時点で時の頭中将に其れを知らせれば姫が筑紫で苦勞することは免れただろうに、光君は其れをしなかったのであり、源殿が一方的に藤殿を攻められる立場の筈はないし、と言って撫子が藤原家に引き取られた方が良かったのかどうかも分からないことを含めて、姫の不幸は姫自身の運命とも言えるし、その上に是が源氏殿がする姫の代返だという意味は到底無視できないので、源殿が「主張する」とまでは言えない気がする。ともあれ、この歌は「源氏の返歌」というよりは「代返」として、姫の歌として読む方が先だろう。確かに、六条院を「かかる渚」などと姫にはとても恐れ多くて言えない言い方だが、それは「代返」の妙として<この邸>という意味だけは成立すると見做したい。それよりも、源殿の歌として「藻屑とぞ見し」を<哀れに思う>と読む事の方が難は多い。「くづ」は<不用なもの、役に立たないもの>であり、それを何の前提も無しに<気の毒だ、可哀相だ>と読めるのかは疑問だし、そういう語を姫本人とその実父を前にして源殿の言葉として使うというのは考え難い。むしろ「もくづ」は<裳に値しない>であり、「見し」は姫自身が自分のことを<そう思った>と読む他は無いように思う。ただ、海尽くしの是だけの歌を即座に返したというのは、作り話の設定だとしても、良く出来ている。

いとわりなき御うちつけごとになむ(姫に恨み言を仰るのは、ひどく無理な御言い掛かりになるかと)」

と聞こえたまへば(とお応え申しなさると)、

「いとことわりになむ(確かにそうでした)」

と(と内大臣は)、聞こえやる方なくて(反論も出来ずに)、出でたまひぬ(式場を退出なさいました)。

#### [第五段 祝賀者、多数参上]

親王たち(みこたち、親王たちを初め)、次々(以下次々と)、人びと残るなく集ひたまへり(高官たちが残らずお祝いに集まりなさいました)。御懸想人も(おんけさうびとも、姫に思いを寄せている人も)あまた混じりたまへれば(数多く混じっていらっしやったので)、この大臣(内大臣が)、かく入りおはしてほど経るを(このように会場入りして長く経つのを)、\*いかなることにかと疑ひたまへり(藤原左家との縁談でも進んでいるのかと疑いなさいました)。\*「いかなることにか」は注に<『完訳』は「裳着は結婚を前提に行れることが多い。求婚者たちは、腰結役の内大臣が簾中に長居しただけでも、結婚に関連あるかと気を揉む」と注す。>とある。従って、補語する。

かの殿の君達(その内大臣家の子息たちで)、中将、弁の君ばかりぞ(長男の右中将と次男の弁少将だけは)、ほの知りたまへりける(姫が別腹の姉であることは、うっすらと知っていらっしやいました)。人知れず思ひしことを(御二人は人知れず姫に恋慕していたことを)、からうも(苦々しくも)、\*うれしうも思ひなりたまふ(表沙汰に成らずに済んで良かったとも思いなりなさいます)。\*「うれし」に<ホッとす、安堵する>という言い方があるのかどうか良く分からないが、下文とのつながりから見ても、与謝野訳文の文意が分かり易いので従う。

弁は(弁は兄の中将に)、「よくぞうち出でざりける(私は何とか打明けずに済んだ)」とささめきて(と囁いて、兄は)、「\*さま異なる大臣の御好みどもなめり(今日の裳着は、一癖ある此処の

殿の御趣味の一つなんだろうよ)。中宮の御類ひに仕立てたまはむと思すらむ(尚侍就任に向けての成人式らしいから、実子でも無い他家の娘の養父として、中宮と同じようにこの姫を入内させようとでもお思いに違いない) \*「様異」は<風変わり、特別>という言い方らしいが、この中将の発言は騙されて実姉を恋してしまった悔しさもあってか、相当に源氏殿に対して非難めいた皮肉っぽい口調に思えるので、敢えて<一癖ある>と意識する。

など、おのおの\*言ふよしを聞きたまへど(それぞれが事情を知って以来に不平を洩らしていたような話を源中将から源殿はお聞きだったが)、 \*「言ふよし」は源殿が藤兄弟の此の場での発言を聞いたのではなく、源殿が大宮と内大臣に姫の出自を打明けた後、その事情を「ほの知りたまへりける」藤兄弟が、もしかするとその情報源の源中将にボヤいたことの「よし(要約)」を源殿が耳にしていた、という意味だろう。

「なほ(まだ)、しばしは御心づかひしたまうて(暫くは世間の様子にお気をつけなさって、姫が実子である旨は公言をお控えなり)、世に\*そしりなきさまにもてなさせたまへ(一穴二根の悪口の立たないようにお計らい下さいませ)。何ごとも(どんなことでも)、心やすきほどの人こそ(気安い身分の低い人なら)、乱りがはしうとも(だらしのない真似も)、かくもはべかめれ(良く有る事でしょうが)、こなたをもそなたをも(わたしもあなたも)、さまざま人の聞こえ悩まさむ(何かと世間の噂が煩く)、ただならむよりはあぢきなきを(普通の身分の者よりは始末が悪いので)、なだらかに(穏やかに)、やうやう人目をも馴らすなむ(ゆっくりと人の目を馴らすのが)、よきことにははべるべき(良いだろうと存じます) \*「そしり」は<非難、咎め、攻撃>だが、その中身は<父親の取り違え>が世間に知れることなのだろうから、それは他人から<責められる>ことと言うよりは<哄笑される→軽口を叩かれる→悪口を言われる>くらいの言い方だろう。

と申したまへば(と内大臣に申しなさると)、

「ただ御もてなしになむ従ひはべるべき(すべて御意向のままに従います)。かうまで御覧ぜられ(娘がこうまでお世話いただき)、ありがたき御育みに隠ろへはべりけるも(手厚い御養育に守られてきましたのも)、\*前の世の契りおろかならじ(前世からの因縁が深かったのでしょう) \*「さきのよのちぎり」は意味深だ。勿論、この言い方は一般的な常套句として<全てがこうなる運命だった>という現状引き受けを認める締め言葉ではあるのだろう。それでも、姫にとっての「前の世の契り」は例えば<藤殿と常夏との情交>であり、例えば<源殿と夕顔との情交>であり、此处ではその後者を色濃く匂わせる言い方には違いない。恐らくは、源殿は夕顔の死に臨場したことまでは藤殿に知らせていない。姫の母御は余り詳しい素性を知らない相手だったが、確かに情交した覚えだけはある、ような事情説明に止めているのではないだろうか。その上で、「おろかならじ」は<まだ聞いていない話がありそうだ>という、内大臣の鋭い指摘のように私には見えるし、源殿にもそう響いた筈だ。

と申したまふ(と応えなさいます)。

御贈物など(おんおくりものなど、腰結役への御礼品などは)、さらにもいはず(言うまでもなく)、すべて引出物(全ての列席者に記念品や)、禄ども(祝儀を)、品々につけて(身分に応じて)、例あること限りあれど(およその相場はあるものの)、またこと加へ(源殿はそれ以上にふるまっで)、二なくせさせたまへり(この上なく執り行いなさいました)。大宮の御悩みにことづけたま

うし名残もあれば(ただ大宮の御病気を理由に内大臣が腰結役をお断りなされた経緯も有るので)、ことごとしき御遊びなどはなし(派手な音楽会などはありません)。

兵部卿宮、

「今はことづけやりたまふべき滞りもなきを(成人式を挙げた以上、今はもう結婚をお断りなさるような支障もないでしょう)」

と、おりたち聞こえたまへど(折り入って申し入れなさいますが)、

「内裏より御けしきあること(帝から尚侍にとの御内意があったのを)、かへさひ奏し(ご辞退申し上げ)、またまた仰せ言に従ひてなむ(また再びのお言葉に従いますので)、異ざまのことは\*ともかくも(その他のことは後回しで)、思ひ定むべき(決めようと思います)」 \*「ともかくも」は<どのようにでも、なんとでも>で、対象を後回しにして<目先のことを片付ける>という意味を表す。

とぞ聞こえさせたまひける(どのように源殿はお応え申しなさいました)。

父大臣は(父の内大臣は)、

「ほのかなりしさまを(仄かに見た姫の姿を)、いかでさやかにまた見む(何とかはつきりとまた見たいものだ)。なまかたほなること\*見えたまはば(なまじ不具合な器量でいらっしやったら)、かうまでことごとしうもてなし\*思さじ(六条殿はこうまでご大層に世話しようとは思いなさらないだろう)」 \*「見えたまはば」は注に<玉鬘に対する敬意。>とある。確かに、主語が分かり難い。 \*「おぼさじ」は注に<主語は源氏。>とある。

など、なかなか心もとなう恋しう思ひきこえたまふ(かえって姫を焦れつつ恋しく思い申しなさいます)。

今ぞ(今になって)、かの御夢も(あの音信不通の娘が現れるだろうと言う夢占いが)、まことに思しあはせける(この事だったかと思ひ当たりなさいます)。女御ばかりには(内大臣は弘徽殿女御だけには)、\*さだかなることのさまを聞こえたまうけり(別腹の娘が尚侍に就く事情を説明申しなされたのです)。 \*「さだかなること」は注に<弘徽殿女御だけには玉鬘の尚侍としての出仕のことを伝える。>とある。確かに、「さだか」は<はっきりした、決まった>ではありそうだが、伝えたのが「出仕すること」だけなら、其れは単にその人事異動の知らせが早い遅いだけなので、殊更に内大臣が女御に説明するには値し無い。内大臣は女御に、太政大臣と内大臣と女御と尚侍との其々の事情と立場を、今の時点で分かる限り、出来るだけ混乱を避けるべく丁寧の説明した筈だ。是は政治そのものだ。しかし内大臣が具体的に何を言ったのか、その中身は全く語られておらず、故に全く分からない。

[第六段 近江の君、玉鬘を羨む]

「世の人聞きに(世間の噂話に)、しばしこのこと出ださじ(暫くはこの事が立たないようにしよう)」と(と内大臣は)、切に籠めたまへど(一切口外なさらなかったが)、口さがなきものは世



の人なりけり(他人の隠し事を暴き立てて吹聴するのが世の常です)。自然に(じねんに、何時誰からともなく)言ひ漏らしつつ(露見して)、やうやう聞こえ出で来るを(次第に噂が立ってきたのを)、かのさがな者の君聞きて(あの出来の悪い近江君が聞きつけて)、女御の御前に(女御のお部屋に)、中将、少将さぶらひたまふに出で来て(中将や少将がいらっしゃる所に出て来て)、

「殿は(父上は)、御女(おんむすめ、姫君を)まうけたまふべかなり(お加えなさったそうですね)。あな(何て)、めでたや(目出度い事でしょう)。いかなる人(どういう人が)、\*二方にもてなさるらむ(太政大臣と内大臣の御二人に大事にされるのでしょうか)。聞けば(聞くところでは)、かれも\*劣り腹なり(その人も市中の女腹とか)」 \*「ふたかた」は注に<内大臣と源氏に。>とある。「御」が無いのは、近江君の粗忽さか。普通の語法なのか。私には分からない。 \*「おとりばら」は<正妻腹に対して妾腹の子>とあるが、正妻以外でも身分のある、とは有力な後ろ盾が居る、夫人なら、いくら近江の君でも「劣り腹」とは言い放てないだろう。自分と同類とでも思って、気楽に対の姫に「劣る(地位の低い)」という語が使った。ただ、近江君の母親は受領級だが、夕顔は大納言級だ。尤も、どちらも没落家ではありそうだが。

と、\*あふなげにのたまへば(場違いに仰るので)、女御(弘徽殿女御は)、かたはらいたしと思して(見苦しく御思いになって)、ものものたまはず(何も仰いません)。 \*「あふなげ」は古語辞典に無い。また、注釈も無い。渋谷訳文には<無遠慮>とあり、与謝野訳文には<露骨>とある。「合ふ無気」なら<場違い>の語感、「敢ふ投げ」なら<投げやり>、「各なげ」なら<いかにもそれらしい→いかにも思慮足らず>。文意からすれば、「場違い」が無難そうだ。

中将、「しか(その人はそのように両大臣に)、かしづかるべきゆゑこそものしたまふらめ(お世話されるだけのものを持っていらっしゃるという事でしょうね)。さても(それにしても)、誰が言ひしことを(誰が言ったことを)、かく\*ゆくりなくうち出でたまふぞ(そう唐突に口に出しなさるのですか)。もの言ひただならぬ女房などこそ(話に尾ひれをつける女房たちが)、耳とどむれ(聞き付けるじゃありませんか)」 \*「ゆくりなし」は<突然に、不用意に>と古語辞典にある。「ゆくり」は<物事が勝手に進んでしまう>語感のようで、「なし」は「無し」ではなく「成し」らしい。

とのたまへば、

「\*あなかま(とんでもない)。皆聞きてはべり(もう皆知っていますよ)。尚侍になる\*べかなり(その人は内侍の長になるんだとか)。宮仕へにと\*急ぎ出で立ちはべりしことは(私が女御仕えに進んで勤めておりますのは)、さやうの\*御かへりみもやとてこそ(そのような地位に就けて頂く御面倒見もあるだろうかと思えばこそで)、なべての女房たちだに仕うまつらぬことまで(他の女房たちでさえ致さない汚れ仕事まで)、おりたち仕うまつれ(手を抜かずに致して来ました)。御前のつらくおはしますなり(私を差し置いて彼女を尚侍に勧めるなど、御前様は冷たくいらっしゃいます)」 \*「あなかま」は<ああやかましい>という意味で、人の言葉を制止する言い方とあるが、是は反論する時の成句のようなものだから、意味としては語句通りの<うるさい、静かにしろ>だけではなく、場面に応じて<ちょっと待て>や<其れは違う>となり、此处では<とんでもない>くらいだろう。 \*「べかなり」は「べかるなり」の撥音便化がさらに無表記された形。「なり」は伝聞推定の助動詞。と注にある。 \*「いそぐ」は<準備する、早くする>だが、古語に限らず現代語でも<逸る、焦る>という前のめり状態を表す語でもある。その意を汲めば<即応した、進んでする>とも言えそうだ。 \*「かへりみ」は「顧み」とあり<面倒見>のことらしい。「御配慮」

くらいに言い換えた方が穏便かとも思ったが、近江君の率直さに見合う言い方ならズバリ<見返り>と言っても良いのかとも思い、結局<御面倒見>にした。

と、恨み\*かくれば(恨み言を言ったので)、皆ほほ笑みて(皆苦笑して)、 \*「かく」は<口に出して言う>。

「尚侍あかば(尚侍の席が空いたら)、\*なにがしこそ望まむと思ふを(いつそこの私こそなりたいたいと思うものを)、\*非道にも\*思しかけけるかな(まさかそれをあなたがお望み為さっていたとは)」 \*「なにがしこそ」は注に<子息たちの詞。『完訳』は「女の職掌の尚侍に男も志願したいとは、愚弄の言葉である」と注す。>とある。 \*「ひだう」は<道理を外れている>だが、此处では<意外・考えられない>くらいの語感。 \*「思しかけける」の「けり」は<そうだったんだ!>と<それがそうであったことに初めて気付いた詠嘆を表す助詞>と古語辞典にある。

などのたまふに(などと兄君たちが仰るので)、腹立ちて(近江君は腹を立てて)、

「めでたき御仲に(ご立派なご兄弟の中に)、\*数ならぬ人は(私のような出来損ないは)、混じる\*まじかりけり(入るべきではなかったようですね)。中将の君ぞつらくおはする(中将の君は何て冷たくなさるんでしょ)。\*さかしらに迎へたまひて(早計に私を大臣家に迎え入れなさって)、軽めあざけりたまふ(軽んじて愚弄なさる)。\*せうせうの人は(普通の人)、え立てるまじき殿の内かな(とても立ち行かない御屋敷事情ですこと)。あな、かしこ(おお怖い)。あな、かしこ(おお怖い)」 \*「数ならぬ人」は謙遜の言葉。と注にある。 \*「まじかり」は三人称に付いた形で、不可能の推量の意を表す。と注にある。「まじ」は<不適當>を示す助動詞で、「まじかり」はその連用形。むしろ「けり」の反論口調を拾いたい。 \*「さかしらに」は<心逸って、進んで>と古語辞典にある。注には<中将(柏木)が近江の君を探し出して迎えたことは、「常夏」巻(第一章二段)に語られている。>とある。それでも、近江君が然るべき所に名乗り出なければ、中将が迎えに出向くことも無かったわけで、何も中将の<早トチリ>や<早呑込み>が事の発端ではないが、売り言葉に買い言葉のような応酬であれば、相手の些細な失点に付け込んで罪を擦り付けようとするのは、良く在る言い方だ。 \*「せうせう」は注に<『集成』は「「せうせう」は、「少々」。漢語で、女性の用語としてふさわしくない。『完訳』は「感情の高ぶりとともに短文となり最後は感嘆詞」と注す。>とある。

と、後へざまにみざり退きて(後ずさりして)、見おこせたまふ(睨みなさいます)。\*憎げもなけれど(子供じみていたが)、いと腹悪しげに目尻引き上げたり(とても怒っているように目尻を吊り上げていました)。 \*「憎げ」は<憎らしい態度、可愛げの無さ、愛嬌の無さ、陰のある顔立ち>といったところらしく、「憎げもなし」は<可愛げが無いでも無い→子供っぽい>で良さそうだ。

中将は、\*かく言ふにつけても(近江君がこう言うのを見聞きするにつけても)、「げにし(全く以ってハズレを引いて)過ちたること(過ちを犯したものだ)」と思へば、\*まめやかにてものしたまふ(笑い事では済まない、懽然としていらっしやいます)。 \*「かく言ふ」は注に<主語は近江の君。>とある。 \*「まめやか」は<真面目な様>だが、「まめやかにてものしたまふ」は<真面目な顔>ではないだろう。「真面目な顔」は<畏まって緊張している顔>や<無愛想な顔>や<真面目ぶった顔>などを意味することもあり、必ずしも<一途な思い>や<真剣さ>を示さないし、中将は何も「失敗」を思い詰めている訳でも無いだろう。ま

た、「真面目な様」はくいい加減にしない態度、冗談ごととは思わない>ということだから、そのような状態で居る時の表情は多くの場合<無然としている>ものだ。

少将は、「かかる方にも(此処の女御仕えに於いても)、類ひなき御ありさまを(君の無類の御働きぶりは)、おろかにはよも思さじ(妃も至らないとは決してお思いでは無いでしょう)。御心しづめたまうてこそ(御心を鎮めて念じていらっしゃれば、)。\*堅き巖も沫雪になしたまうべき御けしきなれば(君はアマテラスのように固い岩も淡雪のように砕いてしまう御怒りの御様子だから)、いとよう思ひかなひたまふ時もありなむ(そのうちきっと願いが叶う時もあるでしょう)」 \*「かたきいはほもあわゆきに」は注に<天照大神が素戔鳴尊の行為に怒って「堅庭を踏みて股に陥き、沫雪のごとくに蹴散かし」(日本書紀、神代上)にあることに基づく。>とある。思い付きだが、イザナキとイザナミの神話を古代物理の‘存在概論(そもそも論)’だと考えてみると、三柱(みはしら、三大要素)の内で昼のアマテラス(天照)と夜のツクヨミ(月読・月夜見)は日本語の語音として<空を照らす>なり<月日を読む>なりと対照概念を説明しているが、スサノヲ(素戔鳴尊・須佐之男)は<乱暴な掻き混ぜ屋>として物語られるような語感がそれ自体からは読めない。多分、スサノヲは「進む緒」で<時間計測>を意味し、以って<事象の変化>を表す概念だったのだろう。しかし、現代物理でも光や電波の量・強さとその時間計測は対象の存在を意味することに変わらないのかも知れない。いずれにしても、相手を比べようも無い大きな概念に祭り上げて、その尊大さを揶揄するのは良く在る遣り方で、この段の場面はそのまま今の漫画だ。

と、ほほ笑みて言ひゐたまへり(談笑していらっしゃいました)。

中将も、「天の岩門鎖し籠もりたまひなむや(そのように怒ったまま天岩戸に閉じ籠りなされば)、めやすく(よろしいのに)」

とて、立ちぬれば(去って行ってしまったので)、ほろほろと泣きて(近江君は悔し涙を流して)、

「この君達さへ(兄たちまで)、皆すげなくしたまふに(皆思い遣り無くなさいますが)、ただ御前の御心のあはれにおはしませば(ただあなた様だけが思い遣り深くいらっしゃるので)、さぶらふなり(お仕えに励みます)」

とて、いとかやすく(すぐ気を取り直して)、いそしく(小間目に)、下臈童女などの仕うまつりたらぬ(地下女房や使い走りの童女でさえ行き届かない)雑役をも(ぎふやくをも、汚れ仕事にも)、立ち走り(走り回り)、やすく惑ひありきつつ(気安く何処へでも出入りして)、心ざしを尽くして宮仕へしありきて(熱心に働いては)、

「尚侍に(ないしのかみに)、\*おれを(あたしを)、申しなしたまへ(推薦してください)」 \*「おれ」は注に<。『集成』は「「おれ」は、この当時、相手を低く見ていう二人称。転じて、一人称。普通は使わない言葉であろう」と注す。>とある。庶民代表みたいな近江君の人格を演出する台詞なのだろう。「いとかやすく」以下の文は、近江君の育ちの身分低さと、それ故に自分が評価されるべきは地道な働きぶりだという価値観が良く表現されている。尤も、当時の宮廷読者は共感しないだろうが、私には微笑ましいし、藤殿の大宮腹の血筋は見方によっては、源殿の大納言腹の血筋よりは高貴とも言えるので、その種が受領腹に及んだ時に、方や明石姫は妃候補として育てられ、方や近江君は品の無い娘として描かれる、という少なからず実話であろうその振り幅の大きさを、当時の読者も面白く読んでいたのだろう。近江君は対の姫の当て馬として登場し、実際に、その存在が源殿の都合

の悪さを上手く救ってくれる設定にはなっているようだが、そして物語上の味付けとしても、末摘の落語に続く近江の漫談という寄席芸にも成っていそうだが、夕顔譚は源殿の個人的な拘りであるのに対して、明石姫と近江君との落差は身分社会構造の悲喜交々を浮かび上がらせている。

と責めきこゆれば(迫り申すので)、「あさましう(呆れたものだ)、\*いかに思ひて言ふことならむ(近江君は尚侍を何だと思っ言っているのだろう)」と思すに(と弘徽殿女御は御思いになつて)、ものも言はれたまはず(何とも仰れません)。 \*「いかに思ひて」は<近江君が尚侍というものを何だと思っ>ているのが弘徽殿女御には分からない、という文なのだろう。司を監督する器量からしても、帝の寵愛を受ける器量からしても、近江君はおよそ適性に欠く。ただ<偉い人、部下を多く抱える人>として、近江君は尚侍に憧れているのだろうか。それとも、世間知らず、井の中の蛙も此処に極まって、自分も藤原姫だから王妃の資格が在る、とでも思っているのか。確かに、弘徽殿女御ならずとも言葉を失う近江君の言動だ。

### [第七段 内大臣、近江の君を愚弄]

大臣(内大臣は)、この望みを聞きたまひて(近江君のこの願いの話をお聞きなされると)、いとほなやかにうち笑ひたまひて(大笑いなさつて)、女御の御方に参りたまへるついでに(女御のお部屋に参上なされた折に)、

「いづら(どこにいる)、この(これ)、\*近江の君。こなたに(こちらにお出でなさい)」 \*「あふみのきみ」については、注に<『集成』は「この」は、強めの気持で発している」と注す。「近江の君」という呼称のしかたは、女房名のような呼び方である。>とある。

と召せば(とお呼びになると)、

「\*を(はい)」 \*「を」については、注に<『集成』は「はい。女の応答の言葉。『類聚名義抄』に「吁」に「ヲオ」の訓があり、「女答詞」とある。『新大系』は「人の召し侍る御いらへに、男は「よ」と申、女は「を」と申なり」(なよたけの物語)」と注す。>とある。態々こういう返答の仕方を書くのだから、これは女房のような応答なのだろう。とはいえ私には、娘らしい応答または貴人らしい挨拶がどんなものかは分からないが、もう少し馴れ馴れしいか、もう少し重々しいか、いずれにしても是とは違うような気はする。

と、\*いとけざやかに聞こえて(とてもはきはきと応えて)、出で来たり(出て来ました)。 \*目上に目下がはきはきと応えるのは確認効率が高まる正しい態度だが、複雑な仕事を任された者はその意味を踏まえて総合的な報告をしなければならぬので、単純な応答で事足りることは少ない。勿論、時と場合によっては即答こそが求められるが、並べて言えば単純応答は下臆の態度だ。

「\*いと(そなたが本当に良く)、仕へたる御けはひ(女御に仕えている御働きぶりは)、公人にて(おほやけびとにて、女官としても)、げにいかにあひたらむ(確かにどんなにか適任であろう)。尚侍のことは(尚侍になりたいということは)、などか(どうして)、おのれに疾くはものせざりし(私に早く言わなかったのか)」 \*「いと」は<程度の大いこと>を示す副詞とのことで、良い場合にも悪い場合にも使われるが、「いと仕へたる」で<良く勤めている>という言い方になるのは、この場面に規定される意味合いなのだろうか。語感だけからでは私には<良い>という積極的評価、というか内大臣が近江君を褒める気持ちが伝わって来ない。いやむしろ、是は内大臣の近江君に対する揶揄だから、意図して<良い>という事は言わずに、

文字通り<大変に仕えている>という内大臣の言い方を、近江君ならくとても良く使えている>と受け取るだろうという、内大臣の皮肉っぽい言い方かも知れない、とまで思うが、言い換えとしては分かり易さを狙って<本当に良く>とする。

と、いとまめやかにてのたまへば(とても真面目ぶって仰るので)、いとうれしと思ひて(近江君はとても嬉しいと思つて)、

「さも(そのような)、御けしき賜はらまほしうはべりしかど(殿の御内意を頂きたくございましたが)、この女御殿など(こちらの女御様が)、おのづから伝へ聞こえさせたまひてむと(私の働き振りからして、当然に殿に私の尚侍への推挙を伝え申し下さるだろうと)、頼みふくれてなむさぶらひつるを(期待を膨らませておりましたが)、なるべき人ものしたまふやうに聞きたまふれば(尚侍に就任する人が既に決まったようにお聞きしましたので)、夢に富したる心地しはべりてなむ(夢で出世したと思つていただけだった気持ちになりまして)、胸に手を置きたるやうにはべる(胸に手を置くようにして気を鎮めています)」

と申したまふ(と申しなさいます)。舌ぶりいともものさはやかなり(遠慮の無い率直なこの近江君の物言いは、弁舌にまるで淀みありません)。笑みたまひぬべきを念じて(内大臣は笑いをこらえなさい)、

「いとあやしう(随分変わった)、おぼつかなき\*御癖なりや(頼りない為さり方ですね)。さも思しのたまはましかば(そうお思いになって私に仰っていらしたら)、まづ人の先に奏してまし(あなたを他の人に先んじて帝に御推挙申し上げたでしょう)。太政大臣の御女(おほきおとどのおんむすめ、あの六条院の姫君が)、やむごとなくとも(ご立派だと言つても)、ここに切に申さむことは(私が是非にとお願い申そうという事は)、聞こし召さぬやうあらざらまし(帝はお聞き入れなさらぬことは無いだろう)。 \*「くせ」は<一般的でない、そのもの特有の性質・傾向。>と大辞泉にある。此処では<一般的でない言動>のことで、近江君が女御に不遜にも外的な期待をしたこと、を「くせ」という責め切らない微妙な言い方でからかっているのだろう。で、「あやし」を受けた皮肉っぽい言い方ならく為さり方>の方が現代語の言い換えとしては分かり易いように思う。

今にても(今からでも)、\*申し文を取り作りて(帝に昇進願ひを取りまとめて)、\*びびしう書き出だされよ(美しく書き上げなさい)。\*長歌などの心ばへあらむを御覽ぜむには(長歌などの歌詠みの優れたものを御覧あそばしたなら)、捨てさせたまはじ(帝は放つては置きなさい)。主上は(うへは)、\*そのうちに\*情け捨てずおはしませば(特にそうしたのものには印象浅からずいらつしやいますので)」 \*「まうしぶみ」は<官人が、叙任や官位の昇進を望むとき、その理由を書いて朝廷に上奏した文書。款状(かんじょう)。>と大辞泉にある。「昇進願ひ」や「配属先願ひ」のようなものらしいが、表向きの人事に対する「希望書」だろうから、裏向きの権力者との人間関係に基づく推挙に頼る女官人事に参照されるものとも思えない。それに、朝廷に宛てて提出すると言つても、それを見る最終権限者こそが内大臣だ。天から愚弄する、を文字通り仕掛けた格好だ。 \*「びびし」は「美美し」で<はなやかで美しい。きらびやかである。>または<好ましい。りっぱである。>と大辞泉にある。 \*「ながうた」は「ちやうか」のこととあり、「長歌」は<和歌の一体。5音と7音の2句を交互に3回以上繰返し、最後を多く7音で止めるもの。ふつう、そのあとに反歌を添える。万葉集に多くみえ、平安時代以降は衰えた。ながうた。>と大辞泉にある。私は全く知らない領域だ

が、その形式や長さに求められる教養深さを想像するに、「長歌」は多分に漢詩を習った歌作りかと思われ、長屋の八つつあんの挨拶にも似た付け焼刃の上流言葉の近江君の無教養ぶりでは、とても手に負えない代物だろう。近江君は確か、短歌すらまともに詠めなかったかと思う。で、だからこそ尚侍資格の一端を示して近江君を窘める意図と、実際にはその意図さえ相手の近江君には通じないと分かっているのに、少なからず自虐的に自分と良く似た顔立ちの近江君の短兵急ぶりを面白がってからかっては是を持ち掛ける、という内大臣の趣向のようだ。\*「そのうちに」は現代語の<適宜な時期に>という意味の他に、<その中でも→他の事よりも→特に>を意味する、と古語辞典にある。\*「なさけすつ」は<風流を感じない→印象浅い>。

など、いとよう\*すかしたまふ(とてもうまく騙しなさいます)。人の親げなく(親らしくも無い)、\*かたはなりや(内大臣の度量の欠如です)。\*「すかす」は「賺す」で<だます>だが、多分「透かす、空かす」と同根義で<間を空ける、その間に何かを置く、でも遮った先が見通せて支障が無いように思わせる>みたいなことだろう。\*「かたは」は<不具、不具合、不完全>という形態や状態を示す名詞ないし形容詞で、この語だけで<見苦しい、不都合だ>という心象まで読むのは慎重を期したい。

「大和歌は(やまとうたは、和歌は)、悪し悪しも続けはべりなむ(下手ですが作れます)。\*むねむねしき方のことはた(申し文の正式な文面の方のことについては)、殿より申させたまはば(殿から帝にお申し上げ下されば)、\*つま声のやうにて(私の尚侍推挙を口利きしたようになって)、御徳をもかうぶりはべらむ(お陰を被りましょう)」\*「むねむねし」の「むね」は「胸・棟・宗」などと表記され、事物の<中心>を意味するらしい。此处では申し文について、彩りを添える長歌に対する<正式の本文・本体の>という意味だろう。\*「つま声」は未詳の語句。『完訳』は「これも下賤の言葉か」と注す。と注釈にある。古語辞典には「つまごゑ」は「端声」と表記され<人の意見に言葉を添えること。>とあるが、此处の文章が例示されているので辞典記事の客観性に欠け、皮肉にも当該文章の解説参照になりえず、従い難い。ただ、「つま」は「妻・夫」で<もう一方に寄り添う片方、その一端>を意味しているのかも知れない。であれば、やはり<口添え>という意味で良さそうだが、それなら<御口添え頂いた形になって>くらいの書き方になりそうなものを、この「つま声のやうにて」は<口利きみたいで>のような語感で、なるほど注に在るように下賤同士の間話口調のように見えなくも無い。

とて(と近江君は)、手を押しすりて聞こえみたり(両手を擦り合せて申していました)。御几帳のうしろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ(死にそうなほど可笑しく思いました)。もの笑ひに堪へぬは(笑いを堪え切れない者は)、すべり出でてなむ(部屋を滑り出て)、慰めける(嘖き出すのでした)。女御も\*御面赤みて(弘徽殿女御までも可笑しさに御顔を紅潮させ)、\*わりなう見苦しと思したり(近江君の醜態を身内の恥と、困ったことで見苦しいと御思いになりました)。\*「おんおもてあかみて」は「女御も」と同類を示す助詞の「も」があるので、弘徽殿女御も笑いを堪えているという描写なのだろう。ただ、弘徽殿女御は上品で思慮深く、帝の妃という重々しい立場に居るので、「も」は単に同類を示すというよりは「までも」という強調になると思う。\*「わりなう見苦し」は近江君の醜態に対する女御の見方なのだろう。ただ、身内の恥を曝しているのは近江君だが、それを暴いているのは父大臣なので、その親げないからかいに対しても「わりなう見苦し」と女御は思ったかも知れない。それでも可笑しい対象は近江君で、不謹慎であったとしても父大臣の仕掛けたこの場面は楽しそうだ。

殿も、「\*ものむつかしき折は(気が晴れないときは)、近江の君見るこそ(近江君を見れば)、よろづ紛るれ(何かと紛れるものだ)」 \*「ものむつかし」は<気が晴れない>で、内大臣のこの日の気分のことかも知れないが、やはり源殿の遣り方に漠とした不満が在る、ということを示唆しているのだろう。

とて(と言って内大臣は近江君を)、ただ\*笑ひ種につくりたまへど(ただ笑い者にしていらっしやるが)、 \*「わらひぐさ」は<笑いを起こす物→笑い者>。

世人は(世間の人)、**「恥ぢ\*がてら(内大臣はご自分の照れ隠しで)、はしたなめたまふ(近江君をはずかしめなさっている)」** \*「がてら」は<~を兼ねて>という言い方で、何かの序でに他の何かをすることに拠って、傍目にはその人の行動自体や行動目的が分かり難くなり、その分かり難さを意図して複数動作をしたとしたら、それは<何かを誤魔化す、隠す>ということだ。で、「恥ぢがてら(恥を兼ねて)」とは、出来の悪い近江君が、その血筋を隠しようもないほどに自分と顔立ちが似ている、という恥ずかしい面目なさを何とか笑いで誤魔化したい内大臣の<照れ隠し>だ。少しも古くない、今に通じる心理描写に思える。

など(などの陰口を)、さまざま言ひけり(口々に言っていました)。

(2011年7月18日、読了)